

I 2017年度の東洋文庫

2017年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過、及び内容の要旨は次の通りである。

まず本年度内に生じた役員・職員の異動について述べる。6月の評議員会にて、任期満了となった理事7名の改選が行われた。田仲一成、鶴見尚弘、濱下武志、平野健一郎、福澤武、横原稔、三木繁光の各氏が再任された。又、山川尚義理事からは辞任の申し出があり、ご退任となった。一方、原實監事からも辞任の申し出があり、新たに森安孝夫氏が監事に選任された。任期満了となった評議員は12名おり、このうち8名、荒蒔康一郎、有馬朗人、梅村坦、草原克豪、久保正彰、瀬谷博道、東條和彦、増田信行の各氏は再任された。又、新たに羽田正、高見澤磨、山家浩樹の各氏が評議員に選任された。他4名、大崎仁、岸本美緒、後藤明、間野英二の各氏は任期満了と共にご退任となった。これにより評議員は12名（前年度は13名につき1名減）、理事は10名（前年度は11名につき1名減）、監事は2名（前年度と変更なし）の体制となった。

評議員会に引き続き開催された臨時理事会において、杉浦康之理事が山川氏の後任として専務理事に選出された。又、業務執行理事（常務理事）に、田仲理事、濱下理事、平野理事の各氏がそれぞれ再任された。

職員では、2018年1月に研究部在籍の山村義照研究員が、図書部（閲覧複写課・複写係）に異動、又、客員研究員の相原佳之氏を研究部嘱託研究員として採用した。又、同年3月、普及展示部の牧野元紀主幹研究員が退職した。尚、同氏には4月1日付で文庫長特別補佐として引き続き勤務（非常勤）いただくこととした。

褒章関連では、2017年4月に濱下常務理事が米国学士院（American Academy of Arts & Science）のメンバー（Foreign Honorary Member）に選任され、11月には斯波義信文庫長が文化勲章を受章された。

資金運用では、2017年度中に満期になった債券と、その運用替えは次の通りであった。

- (1) 前年度2017年3月にクレジット・リンク債5億円(利率1.71%)が満期となり、これを高配当利回り株式で運用すべく、前年度中に約216百万円の株式を購入したが、本年度に入った4月に株式を追加で約208百万円購入した。配当利回りは3%弱であるので、運用利回りは若干改善した。
- (2) 6月に満期となったクレジット・リンク債5億円(利率1.7%)は、短期間定期預金で繋いだ後、上記(1)の残金と併せ、劣後債(5年満期)で運用した。この債券買替えにより、運用利回りは低下せざるを得なかったが、予算策定時に想定した想定利回り0.7%は確保する事が出来た。
- (3) 12月に満期となった東京都債2.5百万円(利率0.12%)は、上記(2)の運用残と併せ、株式約8百万円を追加購入した。これにより、運用金額自体は少額であるが、利回りは改善した。このように、運用の一部に高配当利回り株式を組み入れた事により、2015~17年の3ヵ年計画で想定した、新規運用利率0.7%は十分確保出来る水準での運用更新が出来た。

経費削減には引き続き努力しており、節電を実施している。又、本年度も名誉文庫員の方5名より720万円のご寄付をいただいた。

2018年1月には文部科学省より特定奨励費についてのヒアリングがあった。特に重大な指摘事項は無かった。

設備関連では、本館6階書庫の書架耐震補強工事を本年度も継続したほか、ミュージアムの庭に続く通路「知恵の小径」の屋根鉄板が腐食したため張替え、ミュージアムの展示ケースの一部に防犯センサーや反射防止フィルムを取り付けるなど改善を行った。また、2017年7月、降雹により本館屋上に設置されている空調室外機が多数破損したため、修理を実施した。

当文庫のデータベースのアクセス数(訪問数)が月間約70万件となっている。本年度の当文庫の図書は、購入2,275冊、受贈5,000冊、合計7,275冊であった。

モリソン文庫渡来100周年記念事業として下記4冊の刊行物を出版した。
『モリソンパンフレットの世界 改訂増補』(東洋文庫論叢第81)
A Classified Catalogue of The Morrison Library in Toyo Bunko Vol. 1

『東方見聞録展—モリソン文庫の至宝』(図録)

『東洋見聞録』G. E. モリソン特集号

又、勉強出版による『G. E. モリソンと近代東アジア：東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』が刊行された。

2017年10月3日の創立記念日に「モリソン文庫渡来100周年記念」レセプションを開催した。

東洋学講座は、前期に「トルコ大国民議会議録から見るオスマン帝国の滅亡」粕谷元研究員(日本大学教授)、「18～21世紀ウルクチ(烏魯木齊)の歴史の変容—中央ユーラシア史の中の新疆—」新免康研究員(中央大学教授)、「房山雲居寺石経」に刻印された唐代仏教社会」氣賀澤保規研究員(明治大学東アジア石刻文物研究所長)、を開催した。

後期には、「三角測量(日・仏・越)から見るベトナム」坪井善明氏(早稲田大学政治経済学術院教授)、「ヨーロッパから見た東洋のイメージルネサンスから20世紀まで—」彌永信美氏(元国立フランス極東学院東京支部長)「「好古家」と「畸人」の時代—近世期の知的ネットワークと学問の形式に関する—考察—」フランソワ・ラシヨール氏(国立フランス極東学院東京支部長)、を開催した。

シンポジウム等としては、12月に《モリソン文庫渡来100周年記念国際シンポジウム》として「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」を開催し、同月に2日間に渡って「第6回中国当代史に関する日中共同研究ワークショップ」を、3月には国際ワークショップ「中国の外交と国際関係」を開催した。

研究資料の出版では、本年度は定期出版物8冊に加え、オンラインジャーナル1件、論叢類6冊を発刊・公開した。又、各種研究会を計228回開催し、合計参加人数は2,125名であった。受入れ外来研究者4名、外国人研究者への便宜供与は、アメリカ、中国等10カ国より、50名であった。日本学術振興会特別研究員PDとして1名を受け入れた。

ハーバード・エンチン図書館・研究所に対して、当文庫は毎年研究員4名の派遣応募の資格を得ているが、本年度は、林載桓氏(40歳、青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科准教授、中国政治・比較政治)が合格となった。当文庫より本制度でのハーバード留学は小林亮介氏に次いで3人目であ

る。その他、長崎大学大学院が多文化社会学研究科を設立するにあたり、パートナーシップを組むべく協定書を締結した。

当文庫の一般向けの活動を更に強化すべく、一般向けの有料講座「東洋文庫アカデミア」を開催しているが、本年度は、東京新聞とのコラボレーション講座「現代中国理解セミナー」をはじめとして計28講座を開催し、延べ受講者383名であった。更なる規模の拡大に努めたい。

ミュージアムでは、

- (1)「ナマズが暴れた！？安政の大地震展―大災害の過去・現在・未来」2017年4月19日～8月6日
 - (2)「モリソン文庫渡来100周年 東方見聞録展～モリソン文庫の至宝」2017年8月16日～2018年1月8日
 - (3)「ハワイと南の島々展」2018年1月18日～2018年5月27日
- を開催し、年間計34,716人に御来場いただいた。それぞれの図録を「時空をこえる本の旅」シリーズとして発刊した。又、これらの展示に関連した講演会、ワークショップ、ジュニア・プログラム、演奏会等を約20回開催した。

本年度もミュージアムには、フランス大使、オーストラリア大使、アメリカ大使、チリ大使、大英博物館館長はじめ、多くのVIPの訪問を得た。

4月と11月には、六義園のライトアップに合わせた展示「六義園をめぐる歴史」を追加展示し、シーボルト・ガルテンの新たな造形展示物（本年度の東洋文庫賞）は、東京藝術大学院小林かおる氏の卒業作品「ダチョウになりたい」であった。出張展示として、成蹊大学図書館における東洋文庫の展示は本年度も継続した。

株主優待（東洋文庫ミュージアム無料招待券）の利用状況については、これまでの、三菱重工業、三菱商事、そして新規で三菱総合研究所も加わり、合わせて9,610人に御来場いただいた。

前年度に引き続き本年度も月刊のメールニュースの発刊、機関誌である『東洋見聞録』の刊行を行ったほか、年3回の展示サイクルに合わせて、インターン、校外学習、博物館実習制度によりそれぞれ実習生を受け入れた。又、展

示について多数の新聞・雑誌報道があった。

規程関係では、「組織運営規程」、「研究規程」の改定を行った。又、若手研究者を登用するための取り組みとして、「奨励研究員制度」を定めた（2018年4月1日より施行）。